

二 中 の 木

学校報
第12号
H29/12/01



能代市立
能代第二中学校
TEL52-5138

二中・向学と愛校の歴史 七〇周年からの贈り物

式典の挨拶から

この度の七〇周年に際し、多くの同窓生からお祝い、励まし、ねぎらいの言葉を戴き、皆様の様々な思いを感じることが出来ました。その一方で、どの方々からも「様に感じられたものは、『中への誇り』でした。年代の異なる同窓生に共通するこの「誇り」はどこから来るものなのでしょうか。

校訓

一つ目は、二中学生の志をしっかりと支えてくれる校訓です。志の実現にむけそうになったときも、一万八千名を優に超える卒業生は、校訓「自主不屈 友愛」の下に心と体を鍛えてきました。自主とは、自らの志を打ち立てること。不屈とは、諦めず課題を乗り越えること。友愛とは、仲間の幸いに思いを寄せられること。この三つを

間にともる灯りとし、歩みを進めてきたという誇りです。

伝統

二つ目は、本当の意味での伝統です。



創立からの長さだけが伝統の条件ではありません。先輩は、二中魂を磨き大切に後輩へと引き継ぎ、後輩はその二中魂を更に輝かせ引き継ぐように思います。このように思いが、何代にも渡って続くことが伝統であり、能代第二中学校こそ伝統校であるという誇りです。

校歌

三つ目は、心一つに歌いあげる美し

校歌です。昭和二十二年に開校した能代第二中学校は、二年後に能代大火に見舞われてしまいました。資料が不足する中で、寄せ集めの材料であったため、とても新校舎と呼べるものではなかったそうです。それでも、引越し初日に教室から見上げた空は、『目の光青空にみなぎりわり』という歌詞の通りだったと言います。校歌は、その時々思いや歴史を映しながら歌い継がれてきました。この校歌には、明るい未来への希望と潔く変化を受け入れようとする柔らかなさと逞しさが織り込まれているのだという校歌への誇りです。



三つの確信

これら校訓、伝統、校歌の三つの二中魂を確固たる信念、つまりは二中での学びが自らを高めてくれると確信して、生徒と職員は七〇年間を歩んできたのです。この思いは、かつての同窓生や教職員だけではありません。



今こうして、その誇りを一身に受け継

ごうと目を輝かせている、今に励む二中学生三百十名と教職員三十三名も同じ思いです。私達はこの後も校歌、校訓、伝統を三つの確信と呼び、心と行いの拠り所として守り育てていくことをお誓いしたいと思います。



結びになりましたが、本日お集まりの同窓生、地域、保護者の方々をはじめとすると多くの方々のご支援を受け、充実した二中での今があることに感謝するとともに、創立七〇周年から百年へつなげる一歩を今、力強く踏み出したことをご報告します。



生徒会長が、挨拶の中で「七〇年の節目に立ち会える幸せや誇り」と言いました。私には、いろいろな意味に聞こえてきました。これまで二中を支えてくれていた多くの先輩方がいたことに気付けたこと。同窓生は、仲間との充実した二中での生活を大切な思い出として胸に刻んでいることに気付けたこと。



今回の節目を通して、先輩方との新たな絆が出来たこと。伝統に自分達が新たな一ページを記せたと言ふこと等々。皆さんは、どんなふう

に考えますか。
裏面へ続く

二中学生全員の歌から

音楽の時間に、こつこつと頑張ってきた。整列を中心に行った全校でのリハーサルは2回、合計2時間。合唱等の歌に費やした時間は、わずかで済んだ。日本三大県民歌の一つに数えられている「秋田県民歌」は、特に素晴らしい歌です。



二中の全校生徒数が多く、いから出来たことではありませぬ。いや、むしろ人数が多ければ多いほど、この短時間のリハーサルでは難しかったはずなのです。しかし、皆さんは見事にやりきってくれました。体育館に響き渡った皆さんの歌には、来場者の心を揺すり涙させる力がありました。式典前に、二中学生の優しさに感動しました。」と、匿名の年配の女性から電話があった話は、リハーサル中に教頭先生からもありました。声を掛けた後、重そうにしてあげた荷物を持ってあげた二中学生がいたというのでした。たった一人の二中学生で



も人の心を揺さぶり、お礼を言わなきゃ、感動した気持ちも伝えなきゃ。」と思わせ行動を引き出すことが出来たのです。その二中学生三百十名が、思いを一つにして何かに取り組んだ時、その真直ぐな眼差しや信じて疑うことのない行動に、人々が強く惹き付けられないはずがありません。七〇周年の贈り物とは、周囲の方々に応援してもらえたいの条件とは何なのか、人との温かな心の交流が、どんなに大切なことなのかを考える機会を与えてくれたということなのかもしれません。



動に、人々が強く惹き付けられないはずがありません。七〇周年の贈り物とは、周囲の方々に応援してもらえたいの条件とは何なのか、人との温かな心の交流が、どんなに大切なことなのかを考える機会を与えてくれたということなのかもしれません。



記念講演から

正義・公正の心理学」と言う演題で、東北大学名誉教授 大淵憲一先生(二中第19期放送大学宮城学習センター所長)からご講演を頂きました。午後一時三〇分からの講演でしたが、午前中の記念式典にも参加して頂きました。式典までの待ち時間、控室となった校長室で、先生はこんなこ

おっしゃっていました。実は、中学生を対象にした講演は初めてなんです。一年生にもわかってもらえないのかなあ。」とのこと心配をしていらっしやいました。



か、どのような基準によって分析が可能になるのかについて話されたものでした。具体的な社会事象を例に取り、できるだけのわかりやすいようにとご配慮頂いた資料を提示しながらのご講演でした。それでも、中学生にとってはなかなか歯応えのある社会心理学のお話だったと思うのですが...



質問はありますか?」の司会者の声に、すぐに一年生を含む四、五名の生徒から手が挙がりました。勿論、前もって準備した訳ではありません。講演の内容をしっかりと聞いて自分なりに理解したことは、質問の内容

や態度から明らかでした。多くのお客様の前でお話をするというのは、かなり勇気のいることだと思います。私には、先輩、遠いところ私達のためにありがとうございます。先輩の発信に、これまで二中学生の



に付けた精一杯の表現力で先輩のエネルギーに応えます。」という生徒の声が聞かれました。

今回の講演では、思いある人の発信は真剣に受け止め、こちらこそ一生懸命考え思いを返信する、自分だけではなく他人の幸いに心を寄せられる二中学生が育っていることが確認できました。それにしても生徒の聞く力、発信力を讃えたいと思います。



各期同窓生の力強いご協力での像石碑化」、校名掲示パネルの設置」、ドローンによる記念撮影」、記念誌発行」、記念講演」、生徒への記念ハンカチの配布」等の多くの事業を行うことが出来ました。また、PTAや体育文化後援会の保護者の方々のご協力も式典当日のスムーズな運営に欠くことのできないものでした。皆様から感謝申し上げます。【終】

